

よりよき音色を求めて

# for Better Sound Creation

取材協力: トランペットステーション (池部幸彦)



ニューモデルのC管「アルマンド」を吹く、れおさん。「アルマンド」の開発にあたり開発者からは「奏者の余分な負担を減らし演奏に集中できるよう、音程の良さ、B♭管からの持ち替えが楽、ということをも特に大事にした」というコメントがよせられている

この顔、どっかで見たことあるナア...という方も多いことでしょう。そう、映画「スウィングガールズ」の「彼」です...といっても、「映画」ではチョイ役。しかし「映画」のホントの「立て役者」は「彼」だったのです。その「彼」が、BSCのC管の魅力を見つけた!

## 広いところで吹いて見たくなる 楽器ですね

不思議だ...  
みかけはみな同じなのに...

「彼」の名は、山口れおさん。芸名ではなく、ご本名。東京都下八王子に生まれ育ち、中学時代からトランペットに親しんでいたれおさん。「映画」のせいか、ジャズの専門家、とみられることもあるようだが、ご本人は「自分はクラシック吹きです」と、きっぱり。「映画」では、ジャズ、というより、管楽器を吹く楽しさをみんなと分かち合ってきたつもりなんです。映画、というのはこの場合、も

ちろん「スウィングガールズ」のこと。自ら主宰する金管バンド「オルジアプラス」を中心に、活躍のフィールドはクラシックからミュージカルまで幅広い。が、BSCとは今回はじめての顔合わせ。

「ほとんど全部、同じじゃないですか!」

誰もが驚くことだが、BSCは最高機種501Gを除いてはほとんど同じデザイン。しかし不思議なことに、それぞれ吹奏感や音色が違うのだ。「これ、調べてみたら日本人の方がドイツで造っているんだそうですね」

その通り。BSCを愛用しているマ

ーカス・プリンタップ (リンカーンセンター・ジャズ・オーケストラ)もそのアルバムに常にSpecial thanksとしてその名前を表記しているKato氏が、これらの名器の生みの親。若き日に自ら一念発起して現地での楽器造りを志してドイツ語を学び、単身ドイツに渡って腕を磨いてマイスターとして独立、その腕から産み出される楽器は欧米のオーケストラの著名奏者からいづれのモデルも高い評価を得ている。

「ボクは『3035シンフォニー』が好きですね。しかし不思議だなあ...刻印を見なければ違いが判らないのに、

吹いてみると全然違う...あ、この、黒いのはなんですか?」

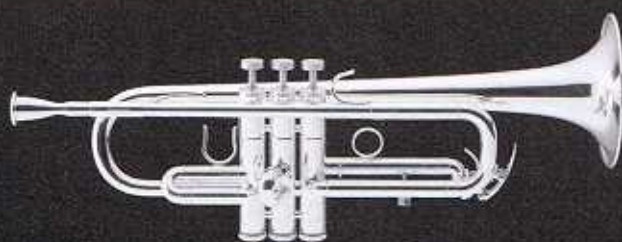
これも、BSCを手にした誰もが抱く疑問の一つ。「フィッシュテール」と呼ばれている樹脂製のカバーが、指掛けについている。その先端がまるで魚のしっぽのようにV字型に成形されているためにそう呼ばれている。他にも、一番抜き差し管の指掛けの曲がり方が違っていたり、ボトムキャップの穴の大きさが違っていたり、ベルには『鳴き止め』のようなメダルがついていたり...マニアならツッコミどころ満載なのだ。Kato氏からは「前述の特長は各モデルの性

# BSC

Brass Sound Creation

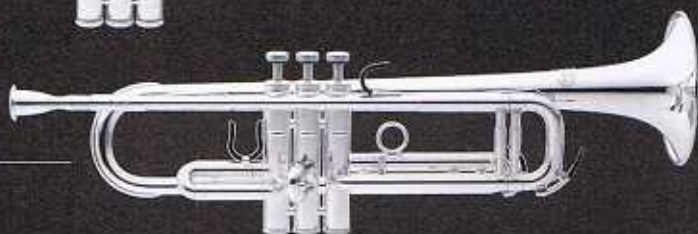
from Luxembourg

- TR-501G  
¥703,500 (税込) <ケース付> 仕上げ: シルバー24K黒メッキ
- TR-303S "シンフォニー"  
¥417,900 (税込) <ケース付> 仕上げ: 黒メッキ
- TR-206S "オールラウンド"  
¥302,400 (税込) <ケース付> 仕上げ: 黒メッキ
- TR-106S "ニューヨーク"  
¥260,400 (税込) <ケース付> 仕上げ: 黒メッキ
- TR-105S "ミレニアム"  
¥207,900 (税込) <ケース付> 仕上げ: 黒メッキ
- TR-C01S "アルマンド" <C管> NEW!  
¥448,330 (税込) <ケース付> 仕上げ: 黒メッキ



TR-303S  
"シンフォニー"

\*マウスピースは付属していません



NEW!  
TR-C01S  
"アルマンド" <C管>



「全部一緒に見えるけど、全部みごとに違うんですね(山口)」

格を考えて採用しており、すべて「音」(もちろん吹奏感など含む)に関係しています。ただし詳細は公表していません」という説明があるのみ。大事なのは「音」というわけだ。

「その気持ちはわかりますね。ミュージシャンにとってはそれが一番大事ですから…でも、さすがにコレは、気になるなあ(笑)」

と、れおさんが手にしたのは、新しい「管アルマンド」。通常、ベルが長く見えるのがC管のデザイン上の特長なのだが、このモデルはまるでB♭管を縮小したようなデザイン。「やはりその理由はわからないんですよね(笑)」

### れおさんとBSC、 新たな企画は 「族々通信」でどうぞ!

さっそく吹いてみていただいた。顔つきが、それまでの柔和な表情からプロフェッショナルの表情に変貌する。

「これは…」

ちょっと厳しい顔。どうしました?

### 音程の良さと、 音色がなによりBSCの宝

今回ご紹介するCATSは、九州唯一のプロ・オーケストラ、九州交響楽団(略称「九響」)の事務局におつとめの大内氏。首席指揮者に秋山和慶氏を抱き、2008年の春には伊藤康英作曲管弦楽のための交響詩「ぐるりよざ」そう、誰もが知っているあの吹奏楽曲のオーケストラ版(2007年改訂)日本初演をしたことでも話題を呼んだ西日本屈指の名門である。大内さんの主なお仕事は「舞台」にある。練習場や本番会場での楽器の搬入やセッティングなど、常に大忙しな大内さんは、中学からトランペットをはじめた楽器族。高校までは吹奏楽、その後福岡大学に進学してからオーケストラへと転進した。古典派からロマン派までという、オーケストラならではの幅広く本格的なレパートリーが魅力で、大学時代には

「ここ、狭いので、できるならちょっと広いところで吹かせてもらってもいいですか?」

取材場所であるトランペットステーションの試奏室は、よく響くはず。しかしれおさんは、もっと広いところで吹いてみたい、と言う。で、特別にお願いして店内で吹かせていただいた。

「お」

## BSC CATS

学生指揮者としても活躍していた。それ以来今も、「福岡OBフィルハーモニー」で活躍している。現在のお仕事は大学の頃のアルバイトから。いわゆる「ボーヤ」として研鑽を積み、その成果が認められて正社員へ…という経歴の持ち主。楽器に関しても造詣が深く、いろいろな名器を熟知されている。また、仕事柄ナマのオーケストラがホールで鳴り響く、その響きを熟知しているから、いきおい自分の楽器選びにもそういった経験が反映される。購入には福岡市内にまだ取扱い店がないため、遠路島村楽器長崎店まで足を運ばれた。九州交響楽団のチューバ奏者である鈴木浩二氏も興味津々で大内氏の楽器選びに同行され、そこで決められたのがTR-106S「ニューヨーク」。鈴木先生には公私に渡って親しくさせていただいているのですが、先生もすっかりBSCの音色に惚れ込まれ、太鼓判をいただきました。ロータリートランペットに似た吹奏感と音色が魅

力的ですね」と語る大内さんは、「ニューヨーク」に続いて、C管「アルマンド」も、プロトタイプを吹いただけで購入を決意するほどBSCをお気に入り。またドイツの知り合いを通して、LAUSMANN「Vienna」のマウスピースも手に入れた。「音程の良さと、音色がなによりBSCの宝だと思えます。ホールのすみずみにまで響く、遠達性の良さに惚れ込んでいます。オケのメンバーからもおかげさまで好評をいただいています」



九州交響楽団事務局の大内さん「アルマンド」「ニューヨーク」とともに(撮影:鈴木浩二九州交響楽団チューバ奏者)

これ、いいぞ!という表情。「これ、いいですね。楽器自体が、広い場所で鳴りがっているような感じでしたから移動してみたんですが、スタジオなどの仕事ではなく、広い会場で、そう、たとえばオーケストラで吹くと最高かも」ために「展示会の絵」からプロムナードを吹いてみる。「音程、いいですね!上のEもGも、補

正しないて吹ける。これはうれしいなあ…」

B♭管がメインのれおさんだが、抵抗なく持ち替えられるのが「アルマンド」の魅力。

「いいなあ…機会があれば、使ってみたいなあ…」

そんなお話をうけて編集部では「ある企画」を考えた。詳しくは本誌「族々通信」をどうぞ!

## ヨーロッパのハンドメイドが培った完成度

ヨーロッパ発。オーケストラでもアンサンブルやソロでも、卓越した表現力と吹きやすさで、いま最も熱い視線を浴びるトランペット、それが「BSC」



古典からモダンまで、BSCトランペットは自分の思うがままに表現できる初めての楽器です。確かな音程、柔らかくて芯のある美しい音色、超高音までフリーな吹奏感はいままでに経験した事がない。  
(フロリアン クリングラー)  
＜ミュンヘンフィル首席奏者＞



BSCトランペットを初めて吹いた時、ピアノからフォルテまでホール中に広がる同調な音色が強く印象に残った。吹き易さ、音程の正確さ、ピストンのスムーズな動き、すべてが信頼できるので100%演奏に集中できる。毎日の多忙な演奏活動を支えてくれる。  
(エーリッヒ リナー)  
＜インズブルック音楽院 / 元ミュンヘンフィル首席奏者＞



音色と吹奏感の両方を満足させてくれる楽器だ。楽に吹け、適度にヘヴィで音のフォーカスがはっきりしている。さらに、自分の思ったままの音を指せる表現力もあり、自分のどんな言葉もそのまま表現してくれる。音色の特徴はラウンド&ファット。響きたい時も叫びたい時も、息の入れ方次第でどちらにも対応してくれる。  
(マーカス ブリンクホッフ)  
＜リンカーンセンター ジャズオーケストラ＞